

しまぐま ニュースレター

認定NPO法人四国自然史科学研究センターでは、剣山とその周辺部に生息するツキノワグマの調査研究を行っています。得られた研究成果をもとに、保全施策の検討、人とツキノワグマのトラブル防止、生態や現状に関する情報発信など、様々な機関や団体と協力して取り組んでいます。このニュースレターでは、これまでの調査から分かった四国のツキノワグマのことや、共生の取り組み状況について、地域の皆さんに広くお知らせします！



捕獲檻を担いで山を歩く



追跡調査



樹皮剥ぎから体毛採取



ツキノワグマの捕獲作業

四国のツキノワグマの生態調査

四国のツキノワグマ（以下、クマ）は人目を避けるように山奥でひっそりと生息しています。私たちは、そんなクマの生態を調べるために、日々山に足を運びます。「四国のクマ」と呼んでいます。が、実際に生息している地域は剣山系とその周辺に限定され、そこに約二〇頭が残るのみです。

クマの行動範囲は非常に広く、全てのクマの動向を追うためには、剣山系周辺の約七〇〇kmを調査しなくてはなりません。この範囲内で、毎年数十箇所調査地点を選定して、捕獲檻や自動撮影カメラの機材等を山に担ぎ上げ、春から秋にかけて様々な調査を行います（調査内容は裏面を参照）。

この地域のクマ調査では多くの時間を山登りに費やします。四国のクマの生息地は自然林がまとまって残る標高の高いエリアに限られるため、一つの調査地点に行くだけでも片道数時間の山登りがセットでついてきます。調査地点に到着してからようやく捕獲檻や自動撮影カメラ等の点検作業を行います。移動時間が多く、決して効率的な調査ではありませんが、根気強くデータを積み重ねてきた結果、四国のクマの生息状況や、基礎的な生態が明らかになってきました。クマの現状を正しく把握することで、地域とクマが軋轢なく共存するための、効果的な対策を講じることに繋がります。

どのような調査をしているの？



いま四国には何頭のツキノワグマが、どの範囲に生息しているのか？子どもは生まれているのか？どんな環境を移動しているのか？様々な疑問を明らかにするには継続的な調査が欠かせません。今回は、四国のツキノワグマの現状に迫るために私たちが山の中で行っている調査内容をご紹介します。この他にも、痕跡調査や目撃現場の検証など調査は多岐にわたります。

■ 捕獲調査

野生個体から生態情報を取得することを目的に、ドラム缶式の捕獲檻でツキノワグマを捕獲します(学術捕獲という)。捕獲したツキノワグマは麻酔で不動化させ、血液、体毛、歯、皮下細胞などの生体サンプルを採取します。身体計測を行い、識別タグや行動追跡装置を装着した後、再び野生に帰します。

これまで多くのクマを捕獲しましたが、猛烈に怒っているクマや、おとなしくじっとしているクマがいたり、性格は個体によって様々です。



■ 自動撮影カメラ調査

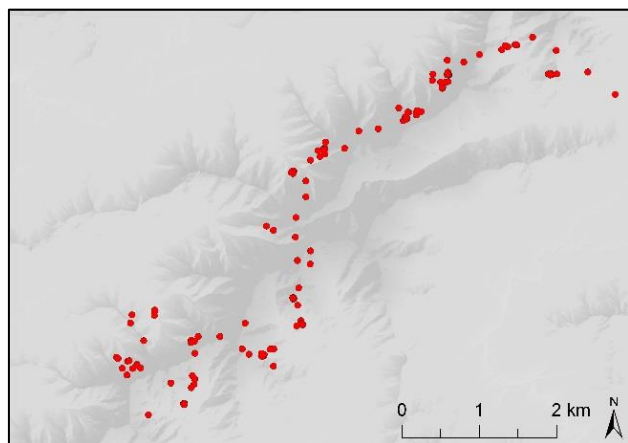
動物の熱に反応して自動で撮影を開始する自動撮影カメラを山中に設置し、その地域での生息確認を行います。剣山系ではツキノワグマ調査の目的で、毎年約100台の自動撮影カメラが様々な機関により設置され、生息分布や個体数の把握を行っています。



■ 追跡調査

捕獲したクマにGPS付の追跡装置を装着し、野生下での行動を追跡します。得られた追跡データからは、その個体の行動範囲や利用環境、移動経路などの情報を高い精度で知ることができます。

これまでの追跡調査から、四国のツキノワグマは、人間の居住地や道路、植林地などを避けて、900～1500mの標高に残る自然林を主に利用していることがわかっています。



ツキノワグマ(メス)の8月の移動軌跡の一例

■ 体毛(ヘアトラップ)調査

体毛を採取し、遺伝情報から個体を識別する調査です。有刺鉄線を用いたトラップを仕掛けることが多いですが、養蜂被害やクマ剥ぎの現場から体毛が見つかることもあります。毛根から得られるDNAを分析し、個体や性別の識別を行います。



有刺鉄線に付着した体毛

■ 餌資源量調査

ツキノワグマにとって非常に重要な秋の食べ物である、ブナやミズナラのドングリの結実量を毎年カウントし、餌資源量を定量的に調べます。



NEXT ISSUE ▶

今回は、ツキノワグマと地域のトラブル防止の取り組みをご紹介します！

認定特定非営利活動法人
四国自然史科学研究センター
高知県須崎市下分乙470の1
TEL/FAX 0889-40-0840
Email bear_info@lutra.jp
担当: 安藤・山田

本ニュースレターは独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成により作成されました。

